

# 海を詠う

岩井圭也

## 第七話

一見、北園きたぞのさんの顔つきは変化がないようだった。だがよく見れば、小鼻がうごめき、身体が左右に揺らいでいる。

「はつきり言って、きみの原稿には大して期待していなかった。だからなおさら驚いた。これが傑作けっさくだとわからないやつは、文学をやる資格がない」

北園さんの口から小さな唾つばが飛んで、畳に落ちた。これほど興奮して話す人だとは思わなかった。

「本当に、誰にも自作の詩を読ませたことがないのか？」

「まったくくない、というわけでもないんですが」

「川崎かわさきは読んだことがないと言っていたが」

真つ先に伊藤いとうさんの顔が浮かんた。もし、ここで伊藤さんが激怒げきどしたことを伝えたら、北園さんはなんと言うだろう。試してみたい気もしたけど、さすがにその度胸はなかった。屋根裏の三畳間さんじょうまに、余計な火種ひだねを持ちこみたくはない。

以前、百田宗治ももたそうじに詩を見せて褒められたことを話した。北園さん

は呆れたように「なんだ」と言った。

「すでに気付いている人間がいるんじゃないか」

「でも、わたしの書くものは、詩と呼ぶには不十分な気がして」

「文字が連なっていれば詩になるんだと言っただろ」

「自信がないんです」

北園さんの顔を見ることができなかった。自信がないことを、自信たっぷりに断言している己が滑稽だった。扉の向こうから足音が聞こえた。誰かが三階への階段を上っているようだった。

「自信なんてもの、誰も持ってはいない」

北園さんは天井を見上げた。視線の先には屋根裏部屋がある。

「文芸レビューの頭の川崎だって、川端康成に褒められた伊藤だって、宴会でわいわい騒いでいる衣巻だって、みんな同じだ。きみの目には、あの連中は自信満々に見えるかもしれない。でも内心では、他人からの無視と非難を恐れて縮こまっている。心の隅ではびくびく怯えながら、それでも毎号雑誌をつくっている。十全な自信を持ち合わせている文人なんていないし、そんな文人がいるとしたら、ただの恥知らずだ」

吐き捨てるように北園さんは言った。漆塗りの腕のように、瞳がつやめいていた。

「……北園さんも、ですか」

「もちろん。作品を発表するたび怖くて仕方ない。しかしこの不安は、非凡な書き手の宿命だ。周囲の書くものとそっくりな文章しか書けない人間なら、なんの不安を抱く必要もないのだろうけど」

ふん、と北園さんが鼻息を吐いた。

言葉はぞんざいだし、女性として丁重くわうに遇あわされているとも思わない。ただ、北園さんの言葉はまっすぐわたしの胸に侵入してくる。それは、わたしを詩人として対等にあつかっているからだ。この人にとってわたしの年齢や性別はどうでもよくて、ただ書いたものが評価に値するか、その一点を注視しているようだった。

「この原稿、預かっていいか」

勢せういに呑のまれるまま、「どうぞ」と答えていた。空の封筒を差し出そうとしたとき、つい畳に手をついた。足が痺しびれていた。北園さんは無言で封筒を受け取り、《青い馬》の原稿をしまった。

「また、なにか書いたら見せてくれ」

「はい」

話すことはもうなかった。整頓せいとんされた室内に、真夏の日が差し込んでいる。室内の暑さにいまさら気が付いた。「それと」と北園さんが言う。

「川崎にも、なにか読ませてやれ。寂しがっていたから」

「わかりました」

「怖いだろうが、その怖さもふくめて見せてやればいい」

北園さんは、座卓に新しい原稿用紙を広げて、腕を組んだ。帰れ、という合図だろう。わたしは札を告げて、部屋を後にした。

三階に上がると、案の定、人がいた。返品の山に埋もれて、作業をしている頭だけが見えた。

「少しいい？」

「ちかか。どうした」

兄の声だった。きょうはもうひとつ、原稿を持ってきていた。前に書いた〈昆虫〉だった。本当は北園さんに読んでもらうつもりだったけど、思いのほか〈青い馬〉を褒められたせいで出しそびれた。

「見せたいものがあるんだけど」

「うん？」

「詩を書いたの」

おう、とも、ほう、とも取れる声が上がった。兄が雑誌の隙間すきまから顔を見せる。北園さんと会ったことを言うべきか迷ったけど、やめた。兄にはできるだけ素直な目で詩を読んでほしかった。

いつの間にか、わたしは自分の書いたものを〈詩〉だと、迷いなく言えるようになっていた。

世田谷せたがやの家のわたしの部屋は、戸を開け放すと庭がよく見えた。

夏のあいだは、縁側に座って夕涼みをするのが好きだった。友達が訪ねてきたら、庭にテーブルを出して、そこで語り合うこともあった。

八月、律ちゃんりっちゃんと久しぶりに腰を据えて話をしたのも、その縁側だった。律ちゃんはいまもこの家に間借りしているが、小石川の画塾に出かけていることが多く、わたしはわたしで銀座に行ったり外泊したりしているため、顔を合わせる機会はそうなかった。

「びっくりしちゃった、ふたつも同時に」

夏物の銘仙めいせんを着た律ちゃんは、テーブル上の二冊の雑誌を手にとって「本当に」と息を吐いた。

ひとつは北園さんの〈白紙はくし〉の最新号で、〈青い馬〉が掲載されている。もうひとつは〈ヴァリエテ〉だった。文芸レビュー社が今月創刊した雑誌で、編集は兄が担当している。新しい雑誌をつくろうと思った動機はわからないけれど、やはり兄も、自分の裁量で編集できる雑誌がほしかったのだと思う。〈文芸レビュー〉の誌面を仕切っているのは実質的に伊藤さんであり、文学を志こころす者として、そこに不満がないわけではないのだろう。その〈ヴァリエテ〉創刊号に、〈昆虫〉が掲載されていた。

わたしの詩を読んだ兄の反応は、上々だった。新鮮で面白い、と褒めた後に、どうしてもっと早く見せないんだ、とまで言った。ちよう

ど〈ヴァリエテ〉創刊号に載せる作品を吟味ぎんみしている最中だったらしく、その場で〈昆虫〉を採用してくれた。

これまで文壇の地下深くに潜伏せんぷくしていたわたしは、八月刊行の雑誌で、一度に二点の自作詩を発表することになった。

「わたしがすごいんじゃないの。たまたまだから」

謙遜けんそんしつつも、口の端が緩むのを堪こらえることができなかった。律ちゃんは擦れたところのないまっすぐさで、「すごい、すごい」と言ってくれた。

「ちかちゃんの詩、なんだか新しい感じがする」

「そう？」

「間違いない。心の芯から惹かれて、何度も読み返したものだ」

友達からの称賛は、北園さんや兄とは違う意味でうれしかった。

舞い上がるような喜びよりも、裏切らないで済んだ、という安堵感あんどかんが強かった。律ちゃんが東京で画家の夢を追うことに決めたのだった、きつと先に上京していたわたしの影響がある。成功とまでは言わないまでも、少しは詩人らしくなったところを見せないと、面目めんぼくが保てない。

夕風が、夏の庭先を吹き抜けていった。

わたしたちはしばし、互いの近況を報告しあった。わたしは今後も翻訳を続けながら、並行して自作詩を発表していくつもりだった。

律ちゃんは画塾に通いはじめて一年になるが、まだまだ修行中だという。

「早くちかちゃんみたいにな、活躍したい」

「活躍なんて」

「ううん。わたしは動き出すのが遅かったから、うんと頑張らないと」

律ちゃんは北海道にいたところと同じように、顔を赤らめて奮起ふんきを誓った。その清新せいしんさが、まぶしかった。鼻にかけるわけではないけど、東京に染まった、という自覚がわたしにはあった。外面的な点だけではない。人の発言を正面から受け止めず、なにか魂胆こんたんがあるのではないかと相手を疑い、自分の下心をひた隠しにする。そういう性分が、いつからか本能の奥深くに芽生えていた。

一年が経っても素朴そぼくなままでいられることが、皮肉ではなく、うらやましかった。

「あの人とは、どうなってるの？」

律ちゃんがふくみ笑いとともに問いかけてきた。どう言っているかわからず、苦笑で返す。

「伊藤さん、詩はやめたの？ もっぱら小説を書いている、って聞いたけど」

「みたいね」

「なにか聞いてない？　ちかちゃん、よくお家に出入りしているんじゃない？」

思わず、「どうして」と目を見張った。律ちゃんのえくぼがさらに深くなる。どうやら律ちゃんは、別の友達から聞いたようだ。わたしも知っている小樽おたるから来た子で、彼女は和田堀町わだほりちようのアパートから出てくるわたしを見かけた、という。

「それは、まあ……翻訳を教えてもらうために、ね」

「いつから通ってるの？」

「もう一、二年は」

「それはそれは」

律ちゃんは手を口に当てて、ふふ、と笑った。噂話をしているときの彼女は、ひと回りほど歳を食った感じがする。律ちゃんはしばしわたしと伊藤さんの関係をからかってから、ふと真剣な顔をした。

「でも、注意してね」

「なにを？」

「わたし、伊藤さんを許したわけじゃないから」

さつきまでの律ちゃんとは別人かと思うほど、低い声だった。

小樽の「越治こしじ」で聞いた話を思い出す。律ちゃんの姉のシゲルさんは、元恋人である伊藤さんと再会したおり、鬼の形相でこう言われたのだ。一緒にいてくれなければ、この場で殺す。



「ちかちゃんの恋にとやかく言うつもりはないんだけど……やっぱり、気になる」

律ちゃんは思い出したように、テーブルのうちわを手にとってあおいだ。細い前髪が、吹かれるたびにぱたぱたと揺れた。わたしはできただけ穏やかな声をつくって、「ありがとう」と言った。

「大丈夫。心配しないで」

そう。律ちゃんは心配しなくていい。

だって、わたしはすでに伊藤さんの鬼の顔を見ている。〈昆虫〉を読んだとき、伊藤さんの全身からは激情がほとばしっていた。怖かった。それでも、嫌いだとも離れようとも思わなかった。彼に抱かれたことだって、本当は、大声でみんなに言って回りたいくらい誇らしかった。

いまなら胸を張って言える。シゲルさんは、本心から伊藤さんを好いていたわけではなかったのだ。ちょっと怖い顔を見せられたくらいで怖気づくなんて、心からの愛情とは呼べない。もしも伊藤さんに、殺したい、と言われたら、わたしは進んで自分の身体を差し出すだろう。

律ちゃんは不安を吹き消すように、しきりにうちわを使っていた。「余計な口出しだと思うけど。ちかちゃんは素敵な人だから、もしかしたら他に……」

そこで言葉を切り、「ごめん」と黙りこんだ。でも律ちゃんがなにを言おうとしたのかは、わかった。もしかしたら他に、お似合いの人がいるかもしれない。そう言いたかったのだろう。

他、と声には出さず口を動かす。

なぜか、北園さんの顔が浮かんだ。

黒々とした瞳。意思の強そうな鼻筋。不機嫌そうに曲げられた唇。

伊藤さんとは似ても似つかない顔立ちだった。なのに、いったん思いう出すと、頭のなかから消えてくれない。

「律ちゃんには、いい人いるの？」

わたしのことを話すのがいやで、水を向けてみると、律ちゃんはわかりやすくはにかんでみせた。

「こつちが勝手に想っているだけなんだけど」

「いいじゃない」

それからは、律ちゃんの片恋の話になった。話題が逸れたことにほっとしながら、「どんな人なの？」と問いかける。律ちゃんが、ぼそぼそと意中の相手のことを明かしはじめる。

わたしたちはひととき、女学生のように高い声で語り合った。

九月に入っても、夏の名残が尾を引いていた。路上に落ちる影は濃く、頭上から降る光の強さを物語っている。すでに午後六時を過

ぎていたが、太陽の勢いはしばらく衰えそうになかった。

いつものように、和田堀町のアパートに足を踏み入れる。すつかり見なれた揺り椅子に出迎えられた。

おや、と思ったのは、その揺り椅子が揺れているせいだった。

持ち主不明の椅子に誰かが座しているところは、わたし自身を除いて見たことがない。揺れているということは、ついさっきまで誰かが座っていたか、少なくとも椅子に触れたかだ。

なんとなく不吉な予感がした。けど後になって思えば、その予感も後付けだったのかもしれない。だって廊下を進むわたしは、呑気のんきにもこれから伊藤さんと話す翻訳原稿のことを考えていたのだから。

階段で二階へ上がり、二番目の扉をノックして、在室かどうか確かめる。最初、応答はなかった。だが耳をすますと、男女が話し合う声が漏れ聞こえてきた。伊藤さんの部屋にはたまに仲間が訪れるが、女性が来たのを見たことはなかった。この部屋で盗み見た、いくつもの書簡の文面が頭をよぎる。

心臓の音が一気に大きくなる。手のひらに汗が噴ふき出す。了解もなく扉を開けるのははしたないことだとわかっていたけど、いってもたつてもいられなかった。無意識のうちに扉を開けていた。

「あろう」

か細い声で呼びかけながら、室内を見やる。

そこにいたのは、居間であぐらをかいて煙草を吸っている伊藤さんと、差し向かいで座布団ざぶとんに正座している女性だった。和装の見たこともない女性で、歳はわたしとそう違わないように見えた。色が白く、控えめな顔立ちで、ぼんやりとこちらを見ている。

背筋が冷え、指先が痺れた。なにも言われずとも、一瞬でわかってしまった。彼女は、伊藤さんの恋人だ。

目が合うなり、伊藤さんはあわてるでもなく「やあ」と言った。

「どうしたの、ちかちゃん。原稿のこと？」

「あつ、ええ……」

表情をつくることもできず、こわばった顔をがくぐくと上下させる。女性が怪訝そうに首をかしげた。伊藤さんがそちらに顔を向け、

「彼女はね」と言う。

「川崎の妹の愛ちゃんちか。ぼくの幼なじみでもある。手紙にも書いただろう」

女性は「ああ」とつぶやいた。つぶやきにこめられた意味は読み取れなかった。

「文学をやられているんですね？」

「左川ちかさがわという筆名で、〈文芸レビュー〉に翻訳作品を寄稿してくれている」

伊藤さんが女性の問いに答えた。詩を書いている、とは言ってく

れなかった。針で刺されたような痛みが胸に走ったが、気付かないふりをして頭を下げる。

「よろしくお願いします……左川ちかです」

筆名を名乗ったのは、わたしは川崎昇の妹というだけではない、  
と思い知らせるためだった。女性は軽く会釈えしゃくして、上目遣いでこちらを見る。くつろいだ表情ではあったが、目のなかに宿る警戒心はごまかしようがなかった。

伊藤さんは「そして」と女性に手を向けた。ようやく紹介してくれ  
るらしい。

おがわさだこ  
「小川貞子」

さんざん手紙で見た名だった。瞬時に、小川貞子の筆跡を思い出す。留めや払いのしつかりとした、綺麗な字だった。再度頭を下げようとしたとき、伊藤さんは「いや」と言った。

「伊藤貞子、か」

伊藤さんが目くばせすると、貞子さんは顔を伏せ、照れたように笑った。

稲妻が落ちたように、頭の芯が痺しびれた。質問は山ほどあるのに、「あの」と言っただけの音が出なかった。こちらに顔を向けた伊藤さんは、微笑していた。いつもと寸分違わない微笑だった。指にはさんだ煙草から、陶製とうせいの灰皿に灰が落ちた。

「結婚したんだ」

視界が点滅し、頭がくらくらした。立っているのがやつとだった。

「野田生の だせい、つて知ってるかい。函館はこだての少し南にある、内浦湾うちうらわんに面した街だけだね。貞子はそのから越してきてくれたんだ」

初めて聞いた野田生という地名が、残像のように耳に残った。

いずれ、伊藤さんが部屋に女性を呼ぶのだろうと覚悟していた。

だが、まさか同棲と同時に夫婦になるとは思っていなかった。それに——きわめて愚かしい妄想であることは承知しているけれど——この部屋に呼ばれるのは、もしかしたらわたしかもしれない、という一縷いちるの望みを抱いていたのも事実だった。

「伊藤貞子です」

夫の言葉を反復するように、貞子さんが名乗った。

あらためて貞子さんの風貌ふうぼうを観察する。色は白いが、目の覚めるような美人ではなかった。なぜこの人なんだろう、という疑問ばかりが湧いた。

とっさに思いついたのは、全部吐き出してやろう、ということだった。伊藤さんとわたしがどんな関係にあるか。伊藤さんがどんな目つきでわたしの裸体を見て、どんな手つきでわたしの肌に触れるか。卑猥ひわいな言葉とともに、目の前の新妻に現実を突きつけてやろうと思った。

口が動かなかったのは、歳とともに身につけた良識のおかげではない。それを言えば負け犬になる、と悟ったからだ。貞子さんが勝利したと認めることになるからだ。それにここで暴露ばくろすれば、伊藤さんは二度と抱いてくれないかもしれない。

棒立ちになったわたしに、伊藤さんは「ちかちゃん」と言った。

「悪いけど、原稿は別の日にしてくれるか。今日は、ぼくも貞子も転居の諸々でくたびれてしまつてね。指導できる体力が残っていないんだ」

「ああ……」

「すみませんね」

夫の不始末を詫わびるかのように、貞子さんが言った。その物腰が妙に板についているのも腹立たしかった。わたしが猫だったなら、全身の毛を逆立て、牙を剥むいていただろう。けれど人であるわたしにできるのは、呆然と一礼することだけだった。

「失礼しました」

伊藤さんが「またね」と左手をひらひら振った。

扉が閉まった。

布団の上での痴態を思い出し、吐き気がこみあげてきた。今夜、貞子さんはあの布団で寝るのだ。伊藤さんが何度もわたしを抱いた、あの布団で。壁に手をつきながら、よろよると廊下を進んだ。

階段を下りている途中、タイツを穿いた足裏がすべった。きゃつ、と叫びを上げ、肉がぶつかる音を立てながら、四、五段転げ落ちた。尻と肩をしたたかに打ち、階段の下で倒れたまましばらく動けなかった。床板が頬を冷やした。

そのままの姿勢でいたのは、助けに来てくれるんじゃないか、と期待したからだだった。わたしの叫び声を聞けば、心配した伊藤さんが飛んできてくれる。夫婦になれなくてもいい。でも、せめてそのくらいは、してくれてもいい。

どれだけ待っても、アパートの内部はしんと静まりかえっていた。右肩が焼けるように痛い。もそもそと起き上がると、持参した原稿が床に散らばっていた。拾い集めて封筒にしまっているうち、涙が滲んできた。

やっぱりそうだ。やっぱり、わたしは選ばれなかった。

原稿を抱えてアパートを出た。涙はなをすすり、涙を袖で拭った。貞子さんのしらけた顔を思い出すたび、鼻の奥がつんとした。

——結婚したんだ。

ふざけるな。結婚が、なんだ。あなたがわたしを抱いた過去は変わらない。

おえっ  
嗚咽の代わりに、待っている、という台詞が口から転げ出た。

〈つづく〉